

順位	氏名（議席）	発言の要旨	答弁者
15	山下いづみ（19）	<p>1. 誰もが死を自分事について</p> <p>日本は超高齢社会である。本市においても令和3年4月1日現在、65歳以上が7万516人で高齢化率28%、令和7年には29.2%と予想されている。このような超高齢社会の中、年を重ねていけばいくほど、楽しく、最期を迎えるその時まで、幸せな日々を過ごせるような社会が望まれる。</p> <p>日本財団の人生の最期の迎え方に関する全国意識調査によると、死期が近づいてきたと分かったとき、人生の最期を迎えたい場所として、当事者は58.8%が自宅、次いで33.9%が医療施設と回答。理由は、自分らしくいられる、住み慣れているからなどが挙げられている。一方、絶対に避けたい場所は、42.1%が子の家、34.4%が介護施設と回答。また、人生の最期をどこで迎えたいかを考える際に重視することについて、当事者は95.1%が家族の負担にならないことである一方、子世代は85.7%が、親が家族等と十分な時間を過ごせることと回答し、親子の考えにギャップがある。</p> <p>誰もが迎える死を押し迫ってから考えるのではなく、本人、家族、周りの人たちと元気な時に最期について希望や気になること、死生観について話すことは、互いの生き方を尊重し、思いの相違を埋めるものだと考える。</p> <p>いわき市では、「生と死の祭典」やいわきの「いごき」を伝えるウェブマガジン <i>i g o k u</i> など、明るく、楽しく、そして無邪気に連携を模索し、地域の高齢者をポジティブに支えることを理念に事業を展開している。</p> <p>本市が超高齢社会を通して、より豊かなまちになることを希望し、以下3点について質問をする。</p> <p>(1) 昨年度からがん共生セミナーが始まったが、目的、内容はどのようなものであったか。今年度はどのような内容で行っていく予定か。</p> <p>(2) 高齢者を支える様々なサービスが行われているが、本人が望む生き方を支える取組はどのようなことを行っているのか。</p> <p>(3) 高齢者も若者も死生観や死について考えることや語り合える事業を進めてはどうか。</p>	市長 及び 担当部長